苦難を乗り越え、いざ出陣

文・写真＝岩波 友紀 フォトジャーナリスト

2014年、がれきが残る南相馬市鹿島区の海岸で、乗馬の練習をする騎馬武者。
この海岸は震災後2年間は使えなかったが、地元の人たちによるがれき撤去作業などのおかげで復活した。

福島県の相馬市と南相馬市、双葉郡で毎夏3日間にわたって行われる神事「相馬野馬追」は、この地方最大の祭りだ。出陣する人たちは武士のように振る舞い、競馬や騎馬行列を繰り広げる。この地方では津波で多くの人が犠牲になり、道具や馬も流された。福島第一原子力発電所から20キロ圏内の大熊町、双葉町、浪江町、南相馬市小高区では、全員が故郷を追われた。

祭りどころではない状態だったが、2011年は1日だけの騎馬行列をすることで、1000年以上といわれる歴史を何とかつないだ。私は、震災後にも野馬追を続ける人たちを追ってきた。

「皆さんのおかげで、こうして出陣することができます」。2014年、仮設住宅の広場で当時64歳の菅野長八さんはあいさつをした。その後自宅へ入り、家族4人の位牌の前で手を合わせると、仲間たちが高らかに法螺貝を吹いた。

南相馬市鹿島区の長八さんは、家族も家も野馬追の道具も津波で失った。こんなときに野馬追なんて…… そう思ったときに家族の顔が浮かんだという。「野馬追は一家総出」と言われ、家族全員で野馬追を続けてきた。母のハルヨさんは、陣羽織や袴を手縫いで作ってくれた。文句一つも言わずに馬の世話をし、宴会や出陣の準備をしてくれたのは妻のまち子さんだった。長女・あゆみさんと次男・武身さんは小さい頃から一緒に出陣していた。そんな天国の家族に、「出陣せずに見ていたら、なにやってんだって怒られっと思った」という。道具や馬の提供など、多くの人からの温かい支援もあった。

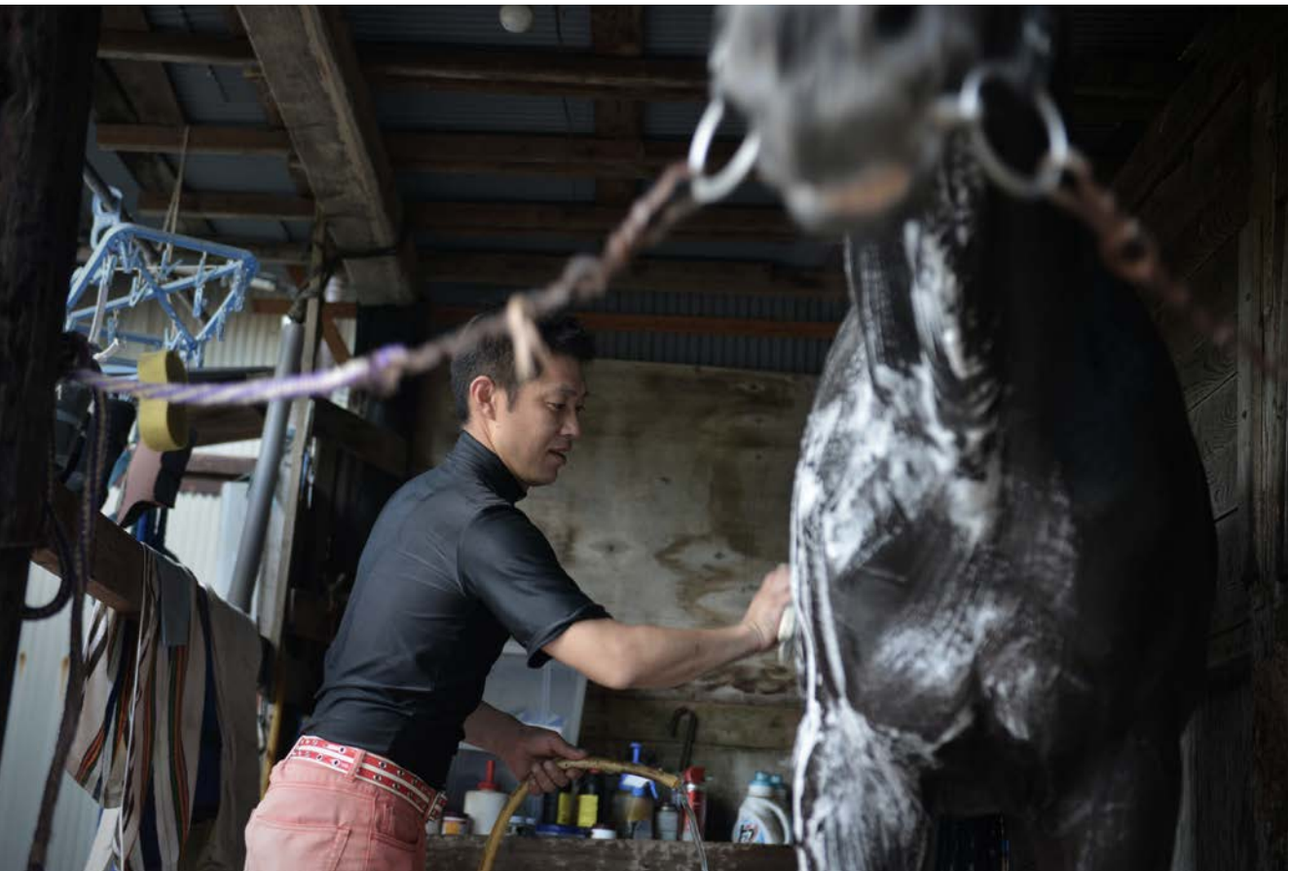
この地方の人たちの野馬追にかける情熱は、尋常なものではない。年に一度の祭りのために馬小屋を所有し、馬を飼い、練習を続ける。一式100万円もする甲冑をいくつも買う。震災と原発事故にもめげず、出陣しようと奮闘する。

なぜ、絶望的な状況でも野馬追にこだわるのか――。長八さんは笑いながら「好きだから」と答え、こう続ける。「すべて失ったけど、野馬追で築いた人間関係だけは今もあるんだ」

家もない状態なのに野馬追には出ようとする姿、遠い避難先から集まる姿。そんな騎馬武者たちの姿からは、趣味的な「好き」を超えた魂の存在を感じる。野馬追はただの祭りではない。津波で、原発事故で失った故郷そのものであり、どんなことがあっても心を支えてくれるもの。避難のために離散しても、仲間たちとのつながりは野馬追を通じて生き続けている。

2015年夏、野馬追のわずか数日前、長八さんの新しい家が完成した。「一人暮らしで家なんていらねんだけど、やっぱ迎えに来る仲間を

岩波 友紀（いわなみ ゆうき）は1977年長野県生まれ。全国紙のカメラマンを経て、現在は福島市に居を構え、東北の被災地を取材する。著書に『1500日 震災からの日々』



左上：2014年7月、仮設住宅から出陣する菅野長八さんたち。
相馬野馬追が開かれる地域は、旧相馬藩の行政区だった5つの「郷（ごう）」で
構成されている。北郷の「侍大将」である長八さん宅には、野馬追の朝、
必ず仲間の騎馬武者が迎えに来る。仮設住宅での出迎えは3年間続いた。

左下：早朝の乗馬練習後、馬の世話をする南相馬市の北原靖久さん。
年に1度の野馬追のためだけに、馬を飼い続けている。
原発事故の風評被害の影響で勤め先の市内の工場での製造ができなくなり、
県外に転勤になった。2013年に戻り、3年ぶりに野馬追に参加した。

上：浪江町の中学生、高西久美子さんは、相馬市の仮設住宅に避難していた。
原発事故で参加者が激減していると聞き、「避難で散り散りになった同級生に勇気を
与えたい」と、2014年に初めて参加した。女性の参加が認められている20歳まで
毎年参加して、最後の年には出場しながら自分で映像を撮って残したいという。